遠藤雄久さん追悼

写真は『東海ジャーナリスト』臨時増刊「遠藤雄久さん追悼」、2018 年 2 月 15 日。昨年 10 月に亡くなったジャーナリスト遠藤雄久さんは、私の「恩師」の一人である。遠藤さんと出会い、遠藤さんからの励ましがなかったら、「月間マスコミ評」を書き続けるなど、マスコミやメディアに対する関心は持続できなかっただろう。

東海ジャーナリスト

2018年2月15日発行　日本ジャーナリスト会議東海地区50連絡会議

臨時増刊　「遠藤 雄久さん追悼」号

ヒューマニスト

批判精神貫いた

政権交代の放送は、1990年の電波三法によって出発した。しかし、わずか2年ならずで、放送局設立の免許権をはじめとする放送政策の基幹部分は、郵政省（現総務省）に権限を移行され、電波はまたこの官僚と放送企業（放送局）の癒着の温床となった。広告収入を財源とする（公共放送）NHK、プラス地域向け放送という免許条件でスタートした民放という、この国の放送体制は、世界でもあるいは、世界と比較すると、大化した「公共放送」と勢くなき営利主義によって利潤追求に邁進する民放、加えて利権・特権を手放すまいと介入を繰り返す政府・官僚の三つどもえの、放送法の解釈問題などを絡ませ、経済問題はもとより、番組・消費の志向をも支配しようとしてきたのが現実ではなかったか。

（2015年5月発行の本誌『特号』遠藤さん執筆の「巻頭言」から）

遠藤さん、ＪＣＪの初心を忘れず さよなら、遠藤さんへ惜別の言葉

再録「テレビ系列再編成の狙い」

「良き女房、兄弟、相談、幸せな人生」

まだ内容

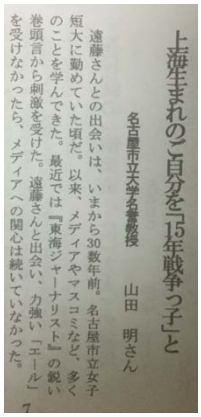
メディア・国際交流などを幅広く貢献

再録・遠藤さんの本誌「巻頭言」集

再録「ＪＣＪ東海の軌跡と展望」

編集・発行人　佐一郎

ほかにも、遠藤さんについて紹介したいことは多いが、別の機会にしたい。追悼号では「さようなら遠藤雄久さんへ惜別の言葉」が掲載されている。私もすこし長い惜別の言葉を書かせてもらった。その原稿を掲載しておきたい。



上海生まれのご自分を「15年戦争っ子」と

名古屋市立大学名誉教授　山田　明さん

遠藤さんとの出会いは、いまから30数年前。名古屋市立女子短大に勤めていた頃だ。以来、メディアやマスコミなど、多くのことを学んできた。最近では『東海ジャーナリスト』の鋭い巻頭言から刺激を受けた。遠藤さんと出会い、力強い「エール」を受けなかったら、メディアへの関心は続いていなかった。

7

遠藤さんとの出会いは、いまから 30 数年前。名古屋市立女子短大に勤めていた頃だ。メディアやマスコミなど、多くのことを学んできた。最近は『東海ジャーナリスト』の鋭い巻頭言から刺激を受けた。遠藤さんと出会い、力強い「エール」がなかったら、メディアへの関心は続いていなかった。

じつは昨年 12 月 3 日にも、遠藤さんの「思い出」をレポートしたが、そこに書けなかったことを綴っておきたい。日本ジャーナリスト会議『ジャーナリスト』「月間マスコミ評」に寄稿して 12 年になるが、遠藤さんから励ましのメールを何度かもらった。遠藤さんとのメールの「やりとり」で最後になったのが、昨年 5 月 15 日 13 時 39 分に届いた、1200 字近くの長いメールである。私は翌日 6 時 9 分、17 時 52 分に返信メールを送った。

遠藤さんからのメールは、私が毎朝書き続けているレポートの「山崎川シリーズ」についてのコメントだった。遠藤さんが私のレポート「愛読者」だったと知り、なんだか嬉しくなった。メールは遠藤さんのご両親のことから始まる。1931 年 11 月、満州事変勃発 2 か月、上海日本人租界に生まれたので文字通り「15 年戦争っ子」だと。1940 年に父の転勤で名古屋に移り住む。現在の昭和区陽明町、山崎川にかかる石川橋を渡ってすぐだ。前置きが長くなったとして、山崎川の話に。

小学校 4 年の夏の思い出、「山崎川をさかのぼる」という勉強会が生き生きと綴られる。檀渓橋のあたりは、底が深く澄み切っていた光景が目に浮かぶと。遠藤さんの組のリーダーが「サホコ姉ちゃん」。一つ年上の優しいお姉さん。後藤佐保子さん、のちにビザンチン美術専攻の名大教授。作家・辻邦生オシドリ夫妻、などと。

メールをもらう前、いつも利用している名大中央図書館で『辻邦生が見た 20 世紀末』という本を読んでいた。何という偶然であろうか。佐保子さんが格調高い「あとがきにかえて」を書かれていた。ご主人に先立たれた後に、すごい文章を書かれる奥さまだと感心していた。遠藤さんからのメールを読んで、もう一度読み返した。

遠藤さんのメールに書かれていた山崎川の檀渓橋に行った。最初は道を間違えてしまい、2 回目の挑戦でなんとか。『尾張名所図絵』にも紹介されている景勝の地だ。高級住宅街になったが、檀渓あたりは緑濃く、山崎川の水が静かに流れていた。

6 月 10 日に「山崎川シリーズ」最終回として檀渓橋をレポートしたが、残念ながら遠藤さんから返信はなかった。現在の山崎川、檀渓界隈の感想などをお聞きしたかった。

（2018 年 2 月 27 日）